



平成29年度  
新東名高速道路建設に伴う発掘調査

## よこのさんのうばらいせき 横野山王原遺跡

主催 公益財団法人かながわ考古学財団  
共催 秦野市教育委員会

### 発掘調査で見える自然災害の痕跡

#### 横野山王原遺跡の発掘調査

秦野市横野に所在する横野山王原遺跡は、中日本高速道路株式会社が計画する新東名高速道路建設に伴い発掘調査を実施しています。とくに、この遺跡はサービスエリアが予定されている地域であり広範囲に及んでいます。

2014(平成26)年10月から着手した調査も3年目となり、縄文時代から江戸時代にいたるまでの数々の遺構や遺物が発見されています。

縄文時代では、狩猟のために掘られた陥し穴や調理施設としての集石遺構が発見され、周囲には土器や石器などの遺物が高い密度で出土しています。奈良・平安時代では、硬く踏みしめられた道状遺構なども発見されています。

この遺跡で特に注目を集める遺構として上げられるのは、「宝永火山灰の廃棄土坑(溝)」です。

江戸時代1707(宝永4)年の富士山噴火により一帯の畑地が火山灰で覆われました。この畑地を復旧するために火山灰を処理し埋めたのが廃棄土坑(溝)です。調査区の全面で確認でき、当時の人々の多くの苦勞が偲ばれるものです。

これら先人達の足跡を、郷土秦野の歴史を探る資料として、活用していただければ幸いです。



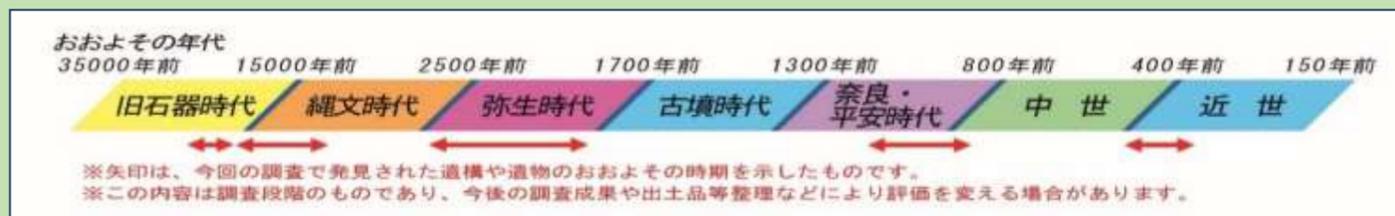
**空から見た横野山王原遺跡** 発掘調査は、宝永の火山灰から取りかかります。表土層を掘削すると幾筋もの灰色の溝跡が見えます。この溝は江戸時代前半までさかのぼり、宝永4年(1707)に噴火した富士山の火山灰を処理した廃棄溝です。噴火は、約半月間続き秦野地方にも甚大な被害をもたらしました。当時は、「砂降り」と呼ばれ、古文書では、「大住郡の村々石・砂1尺4・5寸」(約45cm)、「田畑山野一面砂場」と表されています。また田畑を復旧する様子は、「砂うなへくるみ」(砂を鋤いて包む)、「ほりうずめ」(掘り埋め)などと表現され、火山灰と耕作土を入れ替える天地返しが行われていました。



「地域の特色のある  
埋蔵文化財活用事業」



**測量・記録作業**  
住居跡や陥し穴など発見された遺構、あるいは土器や石器などの遺物は、堆積する土層など含めて記録に残します。写真撮影や出土位置などの測量を行い、記録保存に向けて調査を進めていきます。



平成29年度  
新東名高速道路建設に伴う発掘調査  
**横野山王原遺跡見学会資料**  
2018年2月24日  
主催 (公財)かながわ考古学財団  
共催 秦野市教育委員会  
〒232-0033 横浜市南区中村町3-191-1  
TEL045-252-8689 <http://kaf.or.jp>

## 【宝永火山灰の廃棄溝調査風景】

今から遡ること約300年前、江戸時代の宝永4年（1707）に噴火した富士山の火山灰は秦野市周辺の土地に甚大な被害をもたらしました。

当時の人々は、畑に再び作付けをするため復旧作業を行いました。

廃棄溝は幅約50cm、深いもので約80cmに達していました。



図1 宝永の火山灰廃棄溝



図2 調査風景



図3 天地返しの方法 (絵：土砂崩埋蔵)

## 【縄文時代早期の陥し穴】

縄文時代早期（今からおよそ8,000年前）の横野山王原地域は狩り場だったのでしょうか？ 当時、食料となる動物を捕獲する陥し穴が多数見つかり、底の部分には杭を埋め込んだと思われる小さな穴（ピット）が設けられています。

これらの陥し穴を調査すると地層がずれていることに驚かされます。いわゆる「層スベリ」というもので、大きな地震により地層が滑っている様子がうかがわれます。



図4 縄文時代早期の陥し穴の調査



図5 様々な調査事例



縄文時代早期の遺構確認面は、基本土層の第12層となり、いわゆる「関東ローム層」にかかる漸移層（ぜんいそう）にあたります。地層の表面を遺構確認し「陥し穴（おとしあな）」と思われる土坑が見つかります。

遺構の調査を進めると一見、底面にあたりますが、黒いスジの覆土が続いており、ズレていることが確認できます。さらに、地層が滑っている面で拡張すると、「陥し穴」本来の底面に行き着きます。底面には「杭」を立てたであろう小さなピットが見つかることが多々あります。そのような調査を繰り返しながら、写真に見られるような調査が報告されることとなります。

※ 見学会の会場では、参考事例としてズレた「陥し穴」をご覧いただくことができます。どうぞご期待ください。